
AngelBeats! ~ AfterStory ~

J U N P E I

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AngelBeats! ～AfterStory～

【コード】

N3500M

【作者名】

JUNPEI

【あらすじ】

死んだ世界戦線のメンバーたちは、死後の世界から成仏し、新しい命を得た。この物語は、作者がテレビアニメの「エンジェルビーツ！」を観て、なんとなく書き始めてしまったものです。アニメ最終回のその後を作者が妄想して書いています。エンジェルビーツの知識はほとんどアニメからの受け売りなので、いくら違和感を覚えるかもしれませんが、暖かい目で見守ってやってください。

D e s t i n y (前 書 き)

記念すべき第一話!!

Destiny

教室

HR前、生徒たちはある1つの話題で持ちきりだった。

「おはよう。どうしたの？なんだか騒がしいけど」

「おおゆりっぺ。なんか今日転校生が来るらしいんだよ。皆その話
に持ちきりさ」

「転校生…ねえ」

ゆりっぺと呼ばれた女子生徒は鞆を机の上に置き、席につく。同時に教師が入ってきた。

「おい席につけ。ホームルームはつじめつるよ」

その言葉を合図に生徒たちは席につく。ただし、一人の男子生徒だけ
黒板の前に立っている。

「ねえ日向君。もしかしてあの子が？」

「だろうな。見たことない顔だし」

「はいそこ、静かに。ええ…今日はだな」

生徒たちの期待を裏切り、転校生と思われる男子を放っておいて、
教師は諸連絡を先に言う。

「と云うわけだ。じゃあ最後。皆のお待ちかねの転校生の紹介
だよ」

教師が言つと、転校生は一步前に出た。

「音無結弦です。よろしくお願いします」

簡単に挨拶すると、生徒から拍手が贈られた。

「じゃあ君はあの空いてる席に座って」

教師が指差す先は、窓際が一番後ろ。音無は自分の鞆を持って近づ
いていき、座った。

すると、すぐ前にいる女子生徒と、そのとなりの男子生徒が声をか
けてきた。

「音無君。あたしは仲村ゆり。皆からは‘ゆりっぺ’って呼ばれるわ。よろしくね」「俺は日向だ。好きに呼んでくれ。なんなら‘ひなっち’でもいいぜ」
いきなり話しかけられて戸惑うが、音無は笑顔で答えた。
「ああ、よろしくな」
「ちなみに、彼のことは‘秀樹’って呼んであげてね」
「その名前で呼ぶんじゃねえよ、ゆりっぺ!!」
「秀樹、うるさいぞ」
「ぐああ、先生まで…」

教師の一言で、教室は笑いにつつまれ、HRは終了した。

教室（放課後）

「はあ〜…やっと終わったあ」
今日の授業が終わり、日向が思いつきり背伸びをする。
俺は帰ろうと鞆に荷物を詰め込んでいると、ゆりが話しかけてきた。
「ねえ音無君。あなた入る部活とかって決めてる？」
「いや…決めてないけど？」
「だったらあたしたちの所に来ない？」
「ゆりたちの所って…何やってるんだ？」
俺が質問すると、ふっと微笑み言った。
「何もしてないわ。ただ、適当に集まってワイワイ騒ぐだけよ」
「それだけだけだよ、楽しいぜ。気楽だし」
日向も加わってきた。
正直、部活に入るつもりは無かったから、あまり気が進まない。でも、なぜか二人の誘いを断ったらダメな気がした。
「…じゃあ、とりあえず行くだけ行ってみるよ」
そう言うと、二人は満足そうに微笑み、俺を案内してくれた。

この高校は校舎が2つあり、片方は‘新校舎’と呼ばれていて、クラスは新校舎にあり、普段の授業はそっちで行なわれる。もう片方は‘旧校舎’と呼ばれ、部室や図書室などがある。

俺が入った2年4組は新校舎の2階にあり、二人に案内された部室は、旧校舎の4階（最上階）にあった。

見上げると、そこには‘SSS本部’と書いてあった。

「ここが我らSSS本部よ」

「とりあえず、SSSってなんだ？」

「死ぬ前の世界戦線’の略よ」

「ああ……よくわからないんだけど？」

「とりあえず入れよ。そのことについては後で話してやるさ」

二人に促され、俺は部室に入った。中は意外と広く、長机が6つ長方形の形に並べられていた。

長机の上には、麻雀やらトランプやらぬいぐるみなどが乱雑に置かれていた。いくつか椅子も置かれており、先客が4人いた。

「よお、ゆりっぺ。もしかしてそいつが話題の転校生か？」

その中の一人がゆりに話しかけた。

「ええ、音無君よ。」

音無君。紹介していくわね。

今話しかけてきた彼は藤巻君。いつも長ドスを持つてるのが特徴よ。あそこで眼鏡を磨いているのが高松君。見かけはああだけどホントは馬鹿。

そのとなりが大山君。特徴がないのが特徴よ。

で、あっちで踊ってるのがTK。」

「TK？本名は？」

「…知らない方がいいわ。英語がからつきしダメなのに、意味不明な英語で話すのが特徴よ」

ゆりは一人一人指差して紹介してくれた。

「さて、」

そう言くとゆりは白いベレー帽をかぶり、椅子 長方形に並べら

れた長机に沿って並べられた内の1つに腰かけた。

「ようこそ音無君。死ぬ前の世界戦線へ。歓迎するわ。」

この戦線の活動目的はただ1つ。‘悔いの残らない生き方をする」とよ。」

「‘悔いの残らない生き方’？」

「ええ。人はいつ死ぬかわからないわ。それにどんな死に方をするかもね。」

そしてどんなことが起こるかもわからない。

もしかしたら薬物に手を出して車に跳ねられるかもしれないし、ある日強盗に押し入られて自分以外の家族を殺されるかもしれない。

ある意味で毎日が戦いのよ。」

だから、あたしたち戦線メンバーは悔いが残らないように、毎日を楽しく生きるのを目的にしているのよ。」

ゆりが言い切ると、他のメンバーは頷いた。

‘いつ死ぬかわからない。だから悔いの残らない生き方をする’。俺には何よりも重大なことに聞こえた。

「そっか。ここのメンバーは毎日を楽しくするために、ここにいらんだな。」

「そうさ。ちなみにこれで全員じゃないんだぜ？兼部してるヤツが結構いるからな。」

日向が優しい顔で教えてくれた。コイツもここにいて幸せなんだろうな。なぜだかわからないが、俺は……この戦線に入るべきな気がしてならなかった。

「なあゆり。俺も仲間に入れてくれないか？」

なんかわからないけど、俺スツゲ〜ここにいたい」

俺がそう伝えると、ゆりは満足げに笑った。

「もちろんよ音無君。」

他のメンバーは集まり次第紹介するわ」

ゆりの許可が降り、俺はこの戦線のメンバーになった。

D e s t i n y (後書き)

次回予告(原作風)

麻雀でもやる？

ほ、本物かよおお！！

残念、ツモ。

O h m y g o o d.....。

ゆり、いる？

『 M e e t a g a i n 』

meet again (前書き)

若干音無君のキャラ崩壊になっているかも知れませんが……。

meet again

SSS本部

「あれ？ゆりは？」

授業が終わり、とりあえず本部に顔を出す、そこには日向しかいなかった。

「ああ、ゆりっぺならまだお前に紹介してないメンバーの所に行きたさ」

「…まだいるのか？」

俺がSSSに入ってから4日経った。最初に紹介された藤巻・大山・高松・TKに加え、忍者みたいな襟巻きをして、口癖が「浅はかない」、な椎名。柔道部と兼部している松下、柔道五段だから「松下五段」と呼ばれているらしい。なぜかハルバードなんておっかないものを持っている野田、日向曰くゆりに惚れているらしい。そして天才ハツカーと呼ばれている竹山、「クライスト」と呼んでほしいらしいが、誰もそう呼ばない。この4人とも知り合った。

「今日は学校に出てきてるみたいだからな。全員で6人だけど絶対に驚くぜ？」

「今日は？」

いつもは学校に来ない生徒なんているのだろうか？日向はニヤニヤと笑っている。

するとそこへ、ドアを開けてゆりが入ってきた。

「あら音無君。もういたの？」

「ああ…何か用？」

「日向君に聞いたかも知れないけどあなたにまだ紹介してないメンバーがいるのよ。紹介するからついてきて」

そう言うと、ゆりは本部を出た。俺と日向もゆりについていく。

体育館

「じいよ」

ゆりに案内された場所は……カーテンを閉めきった体育館だった。

「ここよって…誰もいないじゃん」

「まあ見てなさい」ゆりがどこからかトランシーバーを出し一言、いいわよとだけ言うと、ステージの緞帳が上がっていく。

そこには眩しいライトが当てられ、聞き覚えのある音楽がそこから流れてくる。…ってこれってひよっとして？

「知ってるかしら？今ウワサの人気ロックバンド、“Girls

Dead Monster”よ」

「ほ、本物かよおおお！！？」

思わず叫んでしまった。

そしてステージからは目をそらさずに、隣にいた日向の胸ぐらをつかみ前後に揺さぶった。

「知ってるも何もねえよ！！俺ファンなんだよ！！」

「わわわわかつたから落ち着けえええ………！！！！」“Girls

Dead Monster”通称‘ガルデモ’。高校生だけのメンバーなのにも関わらず、プロ顔負けな演奏技術で今話題のロックバンドだ。まさかこの高校に通っていたとは！！

そうこうしている内にガルデモの演奏は終わってしまった。

凄くいい演奏だった…。

SSSS本部

「まあ知ってるとは思っけど一応紹介しておくわね」

ガルデモの演奏が終わると、俺たちは本部に戻ってきた。

俺たちが出るときは誰もいなかったが、戻ってくるとTKと松下がいて、踊っていた。

この2人はなぜかいつも踊っている　　と言うよりTKが松下に踊りを教えている。

「リーダーでボーカルとリードギターの岩沢さん。サブリーダーでリズムギターのひさ子さん。ドラムの入江さん。ベースと…日誌担当の関根さんよ」

俺たちはお互いに挨拶を交わす。

「あと、ガルデモのアシスタントの遊佐とゆいよ」

その2人とも簡単に挨拶を交わす。

「彼女たちは昨日まで曲のレコーディングやら何やらで学校に来れなかったのよ。でも普通の高校生にはかわりないわ。だから、特別視しないであげてね」

「ああ、わかったよ。みんなよろしくな」

『よろしく』

今日のイベントが終わったと言うことで、自由時間となった。何をしようかと思っていると、ゆりが話しかけてきた。

「暇そうね」

「まあな」

「麻雀でもやる？」

「…金賭けたりしないよな？」

「安心なさい。それに1人足りなかったところなのよ」

「わかった。やるよ」

とりあえず麻雀をすることになった。メンバーはひさ子、TK、ゆり、俺だ。

いつもはゆりと俺ではなく松下と藤巻が入っているらしいが、松下は柔道部に行き、藤巻は家へ帰ったそうだ。

ある程度ルールも知ってるからそれなりに健闘できるとおもっていたが…甘かった。

「リーチだ!!」

「残念、ツモ。2700オール」

「またひさ子さんの1人勝ち…」

「Oh my god……」

ひさ子が圧倒的に強かったのだ。

ひさ子以外の俺たち3人がうなだれていると、ドアをノックする音が聞こえてきた。

「…音無君、出て」

「はいよ」

ドアに近づき開けると、1人の女の子がいた。

「ゆり、いる？ あら？あなたはたしか……」

「アンタはたしか……」

「音無結弦……」

「立華…奏……」

t o b e c o n t i n u e .

meet again (後書き)

次回予告

あら？知り合いだったの？

お前も角に置けねえな

It's a wonderful...

麻婆豆腐

一目惚れってヤツか？コレ...

『encounter』

encounter (前書き)

ここまでがプロローグ的な感じだと思ってください。

encounter

SSS本部

俺たちが黙っていると、痺れを切らしたゆりがやってきた。

「どうしたのよ？そんなところでブーツと突っ立って……あら、奏ちゃん。どうしたの？」

こっちに来て初めて客人が立華だとわかったみたいだ。

「音無君。彼女は立華奏ちゃん。私の幼なじみなの。で、この学校の生徒会長」

ゆりが紹介してくれたが、俺は「ああ……知ってる」としか言わなかった。

「あら？知り合いだったの？」

「うん。この前町を歩いてたら食事に誘われた」

「……………」

立華の爆弾投下によって、全員沈黙した。

『な、なにiiiiiiiiiiii!?!』

「It's a wonderfull……」

俺、立華以外のこの部屋にいる全員が驚きの声をあげる。

日向が俺に近づいてきて、肩を掴んできた。

「お前奏ちゃんをナンパかよ!？お前も角に置けねえな!！」

「なっ……ちよっ、ちが」

「さあて音無君？記念すべき馴れ初めを聞かせて頂きましょうか？」
目が笑ってない上に後半声にドスが聞いててかなり怖いんだが？ゆり。

「わかった、わかったから落ち着け!！」

町

この前の日曜日、俺は引越しの手続きやら何やらを終え、まだ何も知らない町をブラブラしていた。

歩いていると、どこからかガルデモの曲の1つ、' My song 'の鼻歌が聞こえた。だが、俺はそれだけではあんな行動を起こさなかつただろう。その歌に反応し、俺が歩いてきた方を振り返ると、一人の女の子が壁に寄りかかっていた。それが立華だった。

立華の姿を見た瞬間、俺の中で何かが解き放たれたような錯覚に陥った。気が付くと俺は、立華の肩に手を置いていた。

「……あの、何か？」

「あ、いやその……大した用じゃないんだけどさ、昼飯でもどうかな？ って……ほら、もう昼時だし」

必死に絞り出した言葉がこんなモノだった。

立華は訳がわからないといった様子で首を傾げていた。

「もしよかつたら……おごる……よ……？」

突如、立華は俺から視線を外し、歩き出す。

俺は思いつき後悔していた。

だが、立華はもう一度振り向いて言った。

「何してるの？ 行くんでしよう？」

「あ、ああ……」

俺は思いつきり安堵した。

俺たちは歩きながら話をした。俺がこの町に引越してきたばかりだということを話すと、立華は「食事をするならいい店がある」と案内してくれた。

行った先は、ごく普通の定食屋だった。

中に入ってみると客は一人もおらず、エプロンを着た愛想のいいおばさんが俺たちを見て言った。

「いらつしゃい……おや奏ちゃん。今日は男の子と一緒にかい？」

「うん」

「そうかいそうかい。奏ちゃんはいつものでいいね？」

そう言われると、こくと頷いた。おばさんは今度は俺の方を向いて言った。

「君は何にする？」俺は迷った。メニューが一応壁に立て掛けてあったが、即決はできない。定食屋というのは当たり前メニューとハズレメニューが必ずあると言っている。なので立華にいつものものは何か聞くと、「麻婆豆腐」と言った。

「麻婆豆腐？」

「ここのはとつても美味しいのよ」

まさかの太鼓判。

では、常連さんの味覚を信じようということ、俺も同じものを注文。おばさんがちよつとだけ同情的な顔をしたのだが、俺はその時気にも止めなかった。

料理が出来上がるまで、俺たちはテーブルに座って待っていた。俺は何故立華に話しかけたのかをずっと考えていた。一目見ただけで、話しかけなければ後悔してしまうような感じがしていたような気がする。

(一目惚れってヤツか？コレ…)

だが、俺はすぐにその考えを振り払った。違うとはつきり思ったのだ。そんな生易しいモノじゃない。もつとこつと魂に刻まれた絆とか……そういう感じがした。

そんなことを考えていると、麻婆豆腐が運ばれてきた。だが……

「こ、これは一体……？」

「何をいつてるの？麻婆豆腐でしょ？」

立華は不思議そうな顔で俺を見てきた。

俺は目の前の麻婆豆腐を見る。普通麻婆豆腐と言えば、茶色に、少し赤を混ぜたような色だった気がする。だが、出てきた‘ソレ’は、見事に禍々しいほど真っ赤だった。

立華は俺のことなんか気にかげず、黙々と赤いソレを食べていく。

水も飲んでいない。

もしかしたら見かけ倒しで、あまり辛くないのかもしれない。そう
思って蓮華てちよつとすくってみる。

……辛そうだ。

「どうしたの？ 食べないの？」

一向に麻婆豆腐を口にする気配ない俺を気遣ったのか、立華が話し
かけてきた。俺は大丈夫だと言うと意を決して、一口食べてみる。

結果……激辛だった。

「一口で激辛！！……あ、でも辛さの後に来るこの風味。これは美
味い！！」

俺がそう言つと、立華は少し嬉しそうに、

「ね？ 美味しいでしょう？」
と言つた。

確かに美味かつたが、一口一口が刺激的過ぎて、立華のように連続
で口に運ぶことはできず、俺が完食するまで30分くらいかかった。
その後は、立華は用事があると言うので連絡先だけ交換して別れた
のだ。

SSS本部

「と言つわけなんだ」

俺が話終えると（もちろん魂に刻まれたうんぬんは覗いて）、ゆり
たちは驚愕の目で俺を見ていた。

「ど、どうした？」

「音無君……あなたあの麻婆豆腐を食べたの！？」

「あ、ああ……激辛だったけどなかなか味わい深かったぞ。なあ、
立華？」

「私の味覚についてこれたのはあなたが始めて」

何故だろう……何故か嬉しくない。

「まあ、この話はひとまず置いときましょう。奏ちゃん、何かよう？」

「あ、そうだったわ。ゆり、SSSの部費決算がまだ届いてないから、早くしてね」

「ああ、ごめんね。明日必ず出すわね」

「うん。よろしく」

それだけ言うと、立華は去っていった。

「皆、いいこと思いついたわ」

その言葉にここにいる全員がゆりを見る。

「もしかしたらあの麻婆豆腐……辛さが落ちてるかも知れない」

「あれでか!？」

「正直言うと、音無君がアレを完食したのが信じられないのよ。だから……皆で食べに行くわよ!!」

「ええええええ!!?」

皆から大ブーイングが起こる。だがゆりがそれを許さない。

「文句言わない!!それでもSSSなの!?!とにかく食べにいくわよ!!」皆渋々従い、ガルデモ以外(疲れていると言っ理由で、無理矢理帰った)で例の定食屋に麻婆豆腐を食べに行った。結果は……俺と遊佐以外は完食できなかった。

encounter (後書き)

次回予告なのですが、勝手ながらもうしません。…と言つよりも出来ません。

僕自身がこの先の展開を少ししか考えてないので、次回予告は今後無しになります。

ですが、それに代わる何かをやるつもりは思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3500m/>

AngelBeats! ~ AfterStory ~

2010年10月9日05時42分発行